

「学校不適応」児童・生徒に対する教育臨床心理学的対応 II

— 勝田市教育研究所「適応指導教室」における実践と今後の課題 —

小沼尚巳*・勝村 操**・吉田昭久***

(1994年3月16日受理)

Educational psycho-therapeutical Approaches to Pupils with Adjustment Problems
in School II —Practice and Recommendations of “The Support Systems for Pupils
with Adjustment Problems in School” at Katsuta Institute for Education

Naomi KONUMA, Misao KATSUMURA and Teruhisa YOSHIDA

(Received March 16, 1994)

はじめに

現代青少年は、様々な問題をはらんだ社会の中に生きることを、余技なくされている。現代社会については、地域の間関係の希薄化、家族関係の変化、さらに学校教育現場における人間関係の変貌が、社会学の先行研究やその他の調査研究から指摘されている。近隣とのつき合いは「全面的なかかわり」よりも「部分的なかかわり」を求める人が多数派になり¹⁾、また、離婚率が上昇し²⁾親の離婚に巻き込まれる子どもが多くなってきている³⁾。さらに、児童・生徒がその多くの時間を過ごす学校教育現場は、まさに現代社会を規定する価値観によって機能している。多様性をたてまえとする価値観が現実には画一化され、また、個々の児童・生徒へのあらゆる評価は「競争」原理に基づいて行われ、「相互不信」を前提に成り立つ人間関係の中で生きざるを得なくなっている⁴⁾。このような生活状況では、直接的に様々な人とのかかわりを体験として持ち得ず、そのことが他者へのかかわり、「人間関係性」を習得する際の阻害要因として働く⁵⁾。「人間関係性」の習得は人とは人のかかわりの中で「生きる」という人格形成上の課題の基盤であり、現代青少年はこのような状況下において多かれ少なかれその課題を背負わされている。こうした現実(Reality)の中で現出してきている「学校不適応」児童・生徒への対応は、どのような視座に立ち具体的に何を課題とする実践であるべきだろうか。勝田市教育研究所「適応指導教室」における「不登校」の児童・生

*勝田市教育研究所教育相談員(茨城大学大学院教育学研究科学校教育専攻)(〒312 勝田市東石川1-1-1)。

**勝田市教育研究所指導主事(〒312 勝田市東石川1-1-1)。

***茨城大学教育学部学校教育講座教育臨床心理学研究室(〒310 茨城県水戸市文京2丁目1-1)。

徒への対応の実践と問題点の指摘から、今後の実践に必要な視座の検討及び問題提起を試みたい。

I 「適応指導教室」の開設

I-1 「適応指導教室」開設の目的と調査研究課題

平成2年度、文部省は「登校拒否児童生徒の適応指導の在り方について、都道府県または市町村の教育委員会に調査研究を委託し、もって登校拒否問題の解決に資する」⁶⁾ といった「登校拒否児童生徒の適応指導の在り方に関する調査研究実施要項」を出している。そこで「適応指導教室」は平成2年度から各都道府県市町の教育委員会によって設置されるようになった。勝田市教育研究所「適応指導教室」の場合、調査研究課題は、文部省の示す課題を参考に、文部省と茨城県教育委員会及び勝田市教育委員会とが協議して決定した。表1に勝田市教育研究所「適応指導教室」、通称「いちょう広場」（以下「広場」と略記）の調査研究課題及び調査研究内容を示す。

表1 調査研究課題及び調査研究内容⁷⁾

調査研究課題	調査研究内容
<ul style="list-style-type: none"> ・登校拒否児童生徒の再登校の促進を図るための援助・指導のあり方 ・専門機関として、学校・家庭・専門機関・地域社会の連携のあり方 ・専門機関として学校における不適応児童生徒への取組みに対しての援助・協力を推進する方法 	<ul style="list-style-type: none"> ・登校拒否児童生徒の再登校を促進するための体験的学習の方法 ・柔軟な幅広い活動内容を個々の児童生徒の計画に基づき展開させる方法 ・本市教育委員会、市内各小中学校、関係機関スーパーバイザーとの連携を密にした、適正な調査研究の推進方法

I-2 「いちょう広場」実践仮説と計画

まず、表1に示した調査研究課題及び調査研究内容より、調査研究の目的とその方法を表2のように設定した。

表2 調査研究の目的

調査研究目的	方法 ⁸⁾
<ul style="list-style-type: none"> ・再登校の促進を図る ・自立心を育み、社会性・協調性を修得する機会を提供する ・集団生活への適応を促進させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・登校することに抵抗感を持つ児童生徒同士の集団を構成する ・学校とは異なる場での小集団の活動をする ・専門機関としての役割、対応（治療）の改善開発についての実践的調査研究を進める ・学校と地域社会との連携の在り方についての実践的調査研究を進める

次に、この方法を具現化するために、各々「キャッチ、トライ、チャレンジ」の名称を付した活動を3軸に据え(表3参照)、この「3つの課題に沿って個々にあった援助をしていかならば再登校が可能だろう」という仮説に沿った実践計画を図1のように設計した。この設計にあたっては、「キャッチ、トライ」の活動名称で示される軸に、各々人格形成上の「介入」⁹⁾課題を、「チャレンジ」には再登校への「介入」課題を設定している。

表3 「いちよう広場」における活動名称・課題及び活動内容

	活 動 内 容					
	ゲ ー ム			ス ポ ー ツ		そ の 他
キャッチ 人間関係を持つ	トランプ、オセロ、マージャン、ダーツ、ジェンガ、カルタ イメーजीラスト、ジャンケンゲーム、ハンカチまわし、UNO ジェスチャーゲーム、漢字ゲーム、3文字ゲーム、頭文字ゲーム 迷進ゲーム、英語ゲーム、あっちむいてホイ、百人一首、宝さがし 符棋、手芸、五日並べ			インディアカ、キックベースボール フリスビー、室内ミニバレーボール ピンポン野球、卓球、野球、色おに		談話、茶話会、面接 日記、帰りの会
トライ 多くの活動・体験をする	作 業	制 作	所 外	余 画	宿 泊	その他
	畑の耕し、種まき 苗植え、除草作業 野菜の収穫 研究所内清掃 自転車置き場片付け 遊戯室玩具整理	調理実習、お面作り 切り絵、 イラスト作成 ポスター作成	市立図書館利用、武田氏館散策、釣り 県民の森ハイキング、サイクリング 水泳教室、高校野球観戦、芸術鑑賞 日立シビックセンター見学、備前祭り 西山荘見学、風神山登山、写生会 虎塚古墳ハイキング、スケート体験 体育館利用	お楽しみ会 お別れ会 豆まき	共同生活、竹細工 しおり作り、登山 築地絵付け、花火 プラネタリウム キャンドルサービス アスレチック	パソコン
チャレンジ 再登校や自己挑戦をする	学 習	テ ス ト	計 画	登 校		
	個室での教科学習 「広場」での教科学習 学校の宿題 自校文集原稿作成	自校学力診断テスト実施	生活目標の設定	自校職員室登校、自校保健室登校、自校校庭での授業参加 自校体育祭見学、自校における全日課参加		

※ ここでは、具体的活動内容を、幾つかのジャンル別に整理した。

チャレンジ	第5課題(挑戦意識)再登校を試みる。											
	第4課題(自立の兆し)全日程を決めて生活する。											
	第3課題(主体的行動)日程を決めて生活する。											
	第2課題(課題認識)定時に広場に参加する。											
トライ	第1課題(自主的選択)毎日広場に参加する。											
	愛他性の課題(他人のために自分の力を役立てる。)											
	自発性の課題(家庭、学校での役割を果たす。)											
キャッチ	人間関係性の課題(人間関係を持つ。)											
	集団参加性、自己表出性の課題(共同、協力によって大きな仕事を成し遂げる。)											
活動名称 行事 計画	自己課題(自分のことは自分でする。)											
	人間関係性の課題(人間関係を持つ。)											
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
活動内容	◎※図書館利用 ◎4月 7月 9月 9日 見学	○武田氏館散策 ◎県民の森ハイキング	◎材料作り ◎大洗釣り体験	○水泳教室 ◎高校野球観戦	◎日立シビックセンター見学	○芸術鑑賞 ◎西山荘見学 ◎ぶどう祭り	○写生会 ◎風神山登山	○虎塚古墳ハイイク ◎対ト体験	○お楽しみ会	○体育館利用 ◎対ト体験	○お別れ会	○修了式

※ ○ 印は市内の所外学習、◎ 印は市外の所外学習を示す。

図1 「いちよう広場」年間計画¹⁰⁾

図1においては、欄内の各課題を、それぞれ「人間関係性、自己課題、自発性、集団参加性、自己表出性、愛他性」の各視点からとらえた。ここで、「集団参加性、自己表出性」を同じ課題内容に据えたのは、自分の感じたことや思ったことを表現する「自己表出」がなされなければ、他者との相互作用に加われず、それは集団への参加が阻まれることを同時に示すからである。

II 「いちよう広場」における実践

II-1 「いちよう広場」の概要

まず、どのような場所での実践であるかを示すため、図2に、「広場」の見取り図を示す。この図は本研究所内の配置を図式的に示したものであり、実測値ではない。

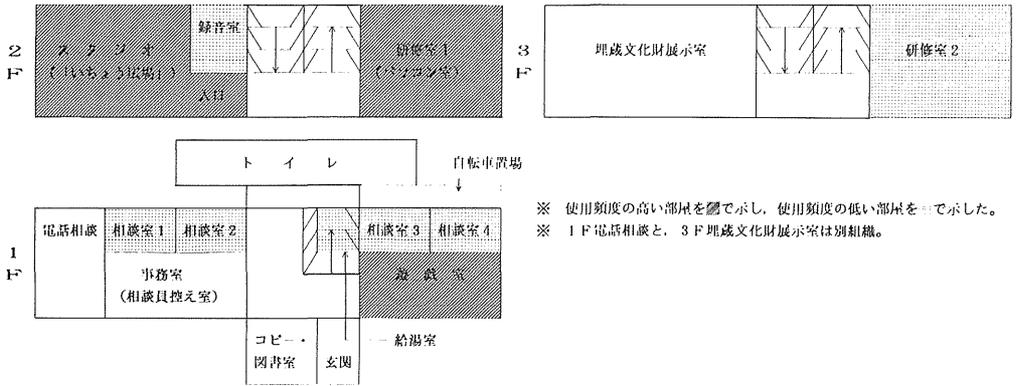


図2 「いちよう広場」見取り図

「広場」は、勝田市内の小中学生を対象とし、火曜日から金曜日朝9時より午後3時まで開級している。夏休み期間中は火曜日から木曜日の同時帯を開級した。対象児童・生徒への対応を点検する為、各月2回、研究所所員、対象事例の担任、スーパーバイザーで構成する事例検討会を設定し、さらに、「広場」事業活動を充実させる為、4月から10月まで各月2回、「広場」調査研究協力者(表4参照)による研修会を設けている。この研修会には、市内小中学校教諭、研究所所員が出席する。保護者との連携としては、各月1回の保護者会を開催している。

表4 「いちよう広場」調査研究協力者内訳

スーパーバイザー	医師2, 大学教授2, 県教育研修センター-指導主事2, 県立高校実習助手*
助言者	県教育庁指導課指導主事, 県内教育事務所指導主事, 水戸市教育研究所所長
運営責任者	勝田市教育研究所指導主事
指導員	勝田市教育研究所所長, 勝田市教育委員会指導室長, 勝田市教育委員会指導主事2
相談員	勝田市教育研究所相談員4 (内1**)
実践協力者	勝田市教育研究所長期研修生**

※ 指導者職名後の数字は人数を表し、数字の無いところは1名であることを示す。

*印は、事例検討会スーパーバイザーを表す。**印は「いちよう広場」児童・生徒への直接の担当者を示す。

II-2 「いちよう広場」児童・生徒への対応の実際

以下にどのような児童・生徒が通所して来ているかを示すために、CASE DATAを表5に示した。

現代の人間関係の希薄化については前述したが、本各事例も例外ではない。表5は直接的、具体的な人と人のかかわりを体験過程としてもち得ない生活状況が、人格形成上、阻害要因として働く¹⁾ということ十分に推量させる。表5を詳細に検討すると、以下の様な事実を看取することができる。休日は家にいることが殆どである。朝食はとらないかあるいは一人でとることが多い。不登校開始に近い時期には、担任の交替や、家族成員の誰かとの別居等の環境に大きな変化があり成育過程には何らかの心理的負荷がかかってきていた状況を示している。また、家に人がいても電話がつかまらない、あるいは共働きで昼間家には誰もいない、など地域社会と各家庭とのつながりが希薄化していることを示唆している。

表6 「いちょう広場」に関する実践記録

月 課題・方針	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	
キャッチ	茶話会、自己紹介 frisbee マジック ◆買い物、ゲーム ジュンガ、卓球、 トランプ 1)	修学旅行写真閲覧 バドミントン バスケットボール 写真の整理 ◆UNO、野球	漢字ゲーム 宝探し ◆ビンポン野球	折り紙 宿泊学習写真整理 百人一首 しりとり卓球 ◆ビンポン主遊び	茶話会 ◆面接 ピンポンパレー	カルタ 人形たおし ハンカチまわし ◆日記記入 録りの会、オセロ 五日並べ、本将棋 回り将棋、 はさみ将棋	キャッチボール バドミントン 人生ゲーム ドジャレ遊び 何に使う?ゲーム ジャンケンゲーム あっちむいてホイ	黒鷲危機一髪 frisbee バドミントン キックパス 鉄棒、ブランコ 山崩し 菓物バスケット 山崩し 遊遊ゲーム キャッチボール ◆ジュスチャー	frisbee バドミントン 中当て 鉄棒、ブランコ 菓物バスケット 山崩し 遊遊ゲーム キャッチボール ◆ジュスチャー	2.5、遊遊ゲーム FEの対決 イメージゲーム 漢字ゲーム 3文字ゲーム 囲碁 うすのちまめけ インディアカ 英語ゲーム ◆大縄跳び ×ゲーム顔立伏せ	紙すもう、豆まき 言葉遊び 室内バレーボール レタ-交換 しりとり卓球	
トライ	市立図書館利用 遊戯室玩具の整理 除草作業 所外学習計画 自転車調整片付け 履き、苗植え ・グリーンフェア いばらき見学 2) ◆電学、バス乗車	所外学習の記録 成田氏館散策 表紙製植物園散策 野外社会 鉢への土入れ 畑の除草作業 畑への水まき 枝豆の苗植え 露の皮むき 樹木両端さ 切り絵、壁留作り ピース手芸 カレンダー作り ◆イラスト作成	宿泊学習夏作成 宿泊学習夏説明 入所式挨拶文作成 写真注文表記入 エンドウの彫取り ラジコン組み立て 畑の除草作業 畑の水まき 畑の支柱立て 野菜的の製まき 宿泊学習、竹細工 佐伯山散策、菜摘 プラネタリウム ビデオ鑑賞、絵付 野外炊事 ・キャンドル サーブス ・スボーツカ 博物館見学	宿泊学習記録 除草作業 調理メニュー 決め 広場活動/。作成 調理実習 材料の買いだし 豆の苗植え 畑の水まき 改竄について話し 眠の摘採 トマトの苗取り	調理、花摘み 野菜への水やり 野菜の苗引き 野菜への追肥 除草作業 野菜の収穫 ワープロ練習 写真大会日程決め 見学	所外学習の記録 調理 芸術鑑賞 野外社会 球根植え 鉢への水やり 野菜の製まき ジョギング	西山荘見学 おどろ狩り ジョギング ウェ-キング 室内写真会 野菜の収穫と調理 遊戯室片付け 日上市風神山登山 所外学習の記録 野外社会 研究所摘採 宿泊学習係決め 宿泊学習夏作り ◆パソコンゲーム	ジョギング ウェ-キング 野菜の収穫と調理 野菜への水やり 菜摘の考案 木鉢運び ◆キ-ボード パソコン作業	お楽しみ会企画 お楽しみ会準備 シンセ演奏披露 調理 木鉢運び ◆キ-ボード パソコン作業	作文、読書感想文 遊戯室学校の話し 調理メニュー 決め 豆まき用お面作成 紙相撲作成 ポスト 馬寄せ 調理	調理メニュー 決め 豆まき用お面作成 紙相撲作成 ポスト 馬寄せ 調理	
チャレンジ	◆毎日広場に参加	◆・個室での教科 学習 ・広場での教科 学習				・自校選抜テスト 実施 ◆生活の日課立て	・学力診断テスト 実施 ◆自校保健室受診	専門学校面接試験 ◆パソコンで学習 担任へ電話連絡	・学力診断テスト 実施 ・スネ-合宿参加 検討 ◆自校職員室受診 自宅学習	担任の空時間調べ 全日課参加 ◆・自校卒業文集 作成	自校専門付近自校	
学校連絡	◆月別活動状況報告(担当者学校訪問)(月1)3)、事例検討会(担任来所)(月2)、電話連絡(随時)											
保護者連携	◆保護者会(月1)、来談(随時)、電話連絡(随時)											
福遊携 心	◆事例検討会(福祉相談員来所)(随時)、来談(随時)、電話連絡(随時)											
担当者研修	道徳指導教員研修会(4-10月:月2、11-2月:無し、3月:月1)											

※ 表中では、活動内容のみを示し、各活動の回数は示していない。

注1) ◆ 印以下の活動は、翌月以降も継続して行ったことを示す。

注3) 遊遊部()内は頻度を表す。

2) 欄内一行以内に入らない活動名には、先頭に・印を付して複数行に記入してある。

4) 福祉事務所との連携を指す。

平成5年度「広場」における実践方略を表6に示した。方略の中に担当者の研修や、学校、保護者、関係諸機関との連携が入っている理由は次の通りである。本研究においては、各児童・生徒の側の変容のみを図るのではなく、「個体と環境との調整作用」¹²⁾を前提とし、対象にかかわる側の変容をも意図する立場から実践しようとしたからである。

Ⅲ 「いちょう広場」における実践経過と問題点

Ⅲ-1 「いちょう広場」実践仮説に関する考察

表6のような実践に伴う「広場」児童・生徒の変容過程を表7に示した。各視点と月の交絡する線内の3区分は「広場」児童・生徒に直接かかわった、本研究所指導主事、相談員、長期研修生3名それぞれの評定である。評定基準には図1「キャッチ、トライ」欄()内の課題を使用した。

表7を全体的にみると、「広場」児童・生徒の変容が如実に示されたのは「人間関係性、集団参加性、自己表出性」の項目である。とりわけ「集団参加性、自己表出性」は同じような変容経過が示された。これは、自己表出がなされなければ集団への参加が阻まれることを明確に示す結果となった。「自発性、愛他性」の項目においても変容が示されたが、他の項目と比較すると変容経過が緩慢であった。これは、「自発性」が「自己表出」と密接に関連する課題であることと、愛他性が「自我の機能のうち最も高度なものひとつである」¹³⁾ということから理解できる。「チャレンジ」欄における課題については、この流れに即した変容過程は殆ど示されず、第1～4課題が再登校の前提になり得なかったことが示唆された。この理由として「チャレンジ」欄の課題は「キャッチ、トライ」の課題をふまえた設定になっていなかったため、「チャレンジ」欄だけが自我機能の視点から遊離した課題設定となっていたことが考えられる。朝早く起床し、学校へ行く用意をととのえても「学校へ行けなかった」という生徒の言葉が単的に示すように、再登校は、第1～4課題の表面的な遂行のみではなされないことが示された。

Ⅲ-2 「いちょう広場」における実践上の問題点

第1に、再登校した児童・生徒のうち、「チャレンジ」欄に示した5段階の課題の流れに即した者はいなかった。機械的にこれらの段階を踏んでいくのではなく、全日課を決められなくとも再登校する生徒や、定時に広場に参加せずとも再登校する生徒が殆どであった。この課題は今後、自我機能形成上の課題とその視点から構造的に検討される必要がある。

第2に、保護者との連携は、各月の保護者会と数少ない来談以外殆どなかったため、人間関係性習得の基盤となる家族関係には「介入」できなかった。表4が示すように、状況から不登校現象が現れてくるのは必然であったと推量できたにもかかわらず、「いちょう広場」と家庭との連携のないところで本人にかかわり、結果的には対象事例の側だけを変容させようとする視座からのみかかわらざるを得なかった。

第3に、仮説で立てた各々の課題に沿った視点を、具体的方略で構造的に実践していなかったため、各具体的活動における担当者からの「介入」が消極的なものに終わった。

第4に、対象児童・生徒の生活環境を十分押さえられなかった。表4に示した通り、対象児童・

生徒が家で過ごす時間は長い。にもかかわらず、担当者は各児童・生徒の家庭での様子についての情報を得ていず、家族への「介入」課題や個々に即した課題設定が不足がちとならざるを得なかった。それ故、家庭での日常生活の実態から判断される「広場」の持つべき機能が検討されず、それを前提とする具体的「介入」を行い得なかった。

Ⅳ 「適応指導教室」における今後の課題

Ⅳ-1 「適応指導教室」での実践に必要な視座

「不登校」は、「学校不適応」としてとらえられる¹⁴⁾。筆者らは、前論文において「学校不適応」の問題性を考察し、その中で「学校不適応」が個々の児童・生徒の人格形成上マイナス要因として働くものとして位置づけた¹⁵⁾。

ところで、R. メイは自我について「対他者関係の場に生まれ、かつ成長する」¹⁶⁾と述べ、また、E. H. エリクソンは自我を「人間の経験や活動を環境に適応する行動に統合する能力を意味するものである」¹⁷⁾としている。自我は人間関係の中において形成され、それは人間生活への適応の働きを持つ重要な視点である。前述の通り、現代社会においては「人間関係性」を習得する基盤が失われており、「対他者関係の場」¹⁸⁾を体験として持つことができにくくなっている。しかも、こうした生活状況で過ごしてきた児童・生徒は、必然的に人間生活への適応の働きを持つ自我を形成し成長させることができにくくなっている。

本研究においては、自我機能の視点から課題を設定し、その仮説を検討した。その結果「学校不適応」児童・生徒に対する、自我機能の視点を重視した構造的な課題設定の必要性が示唆された。

ここで、現在の学校教育状況をみると、一方で中退者の増加が指摘されてきてはいるものの、高等学校への進学率が95%を越えるなど、今や殆どの児童・生徒が約15年以上に渡って学校教育状況へ参加している。これは、学校教育状況を经ずに社会生活を営んでいくことの方が、現実問題としてはむしろ困難な状況であることを示している。さらに、家庭や地域内の人間関係が希薄化する状況にあっては、学校以外での「人間関係性」習得の機会が見出せなくなっている。

こうした生活状況をふまえると、学校教育体制、学校教育状況への参加を、個々の児童・生徒が現代を「生きる」際に必要とされる、人格形成上の課題の一つと位置づけることが必要となる。

児童・生徒の再登校を目的とする「適応指導教室」においては、登校を人格形成上の課題として位置づけ、その前提から現代に「生きる」児童・生徒への対応を講じていくことが重要なこととなる。

Ⅳ-2 今後の実践への課題提起

「学校不適応」児童・生徒への対応方略を設定する際、個々の児童・生徒のおかれている現在の生活環境や成育史の把握が前提となり、そこから「適応指導教室」の持つ「介入」課題の検討と実践が必要となる。また、「介入」課題の検討においては人格形成上の課題を構造的に検討し、とりわけ社会性としてとらえられる自我の諸機能を位置づけ、その諸機能を視点に据えた計画を立案し個々の児童・生徒が「生きる」具体的課題との関連で実践する必要がある。

今後は、自我機能についての理論的前提とその諸機能の構造的関連を把握し、それらを児童・生徒への「介入」課題としてどのように組み立てていくかを検討することが重要な課題となる。

おわりに

平成5年度勝田市教育研究所「適応指導教室」における実践から、「学校不適応」児童・生徒への対応の視座と実践課題とを提起した。今後さらに精深な検討を加える予定である。

本研究遂行にあたっての、勝田市教育委員会及び勝田市教育研究所の諸先生方の多大なご協力を得たことについて深甚の謝意を表したい。

注

- 1) N H K 世論調査部編『現代日本人の意識構造 第三版』（日本放送出版協会,1991),pp.28-37.
- 2) 日本子どもを守る会編『子ども白書・1993年版』（草土文化,1993),p.110.
- 3) 湯沢雍彦『図説 現代日本の家族問題』（日本放送出版協会,1987),p.176.
- 4) 宇留野騎一郎・吉田昭久「『非行化傾向』を示す生徒に対する学校教育現場における教育臨床心理学的の接近－問題提起と課題設定－」『茨城大学教育実践研究』 第12号（茨城大学教育学部附属教育実践研究センター, 1993), pp.273-275.
- 5) 吉田昭久「『人間になる』ということ」津田淳編著『道徳教育の人間学的基礎』（川島書店, 1986),pp.163-164.
- 6) 文部省「登校拒否児童生徒の適応指導の在り方に関する調査研究委託実施要項」（1990),1p.
- 7) 茨城県教育委員会「登校拒否児童生徒の適応指導の在り方に関する調査研究実施計画書」（1993),4p.
- 8) 前掲書7)のp.1.では「ねらい」とされているが、本研究においてはその記述内容から「方法」と修正している。
- 9) 福田隆行・吉田昭久「児童・生徒指導の方略としての集団心理臨床的の接近 — 問題提起と課題設定 — 」『茨城大学教育実践研究』第8号（茨城大学教育学部附属教育実践研究センター, 1989),p.201.において、「介入（Intervention）」概念を「児童・生徒が人間として『生きる』ことに『気づく』ように教師が援助していく働き掛けのことであり、心理治療的『介入』とは、児童・生徒の実態を診断し、適切と思われる援助を行い、その結果を更に次の『介入』にフィードバックさせるという一連の過程をさす」とされており、また、そこでは「『待ち』の姿勢ではない、児童・生徒の問題を発見し、積極的に相談関係にもっていく『迎え』の姿勢が必要となる」と主張している。
- 10) 本研究では勝田市教育研究所「平成4年度適応指導教室『いちょう広場』実践報告」pp.9-12に基づいている。平成5年度「いちょう広場」年間計画表を、自我機能の視点から整理した。
- 11) 前掲書5) p.164.

- 12) 坂本昇一「学校不適應の本質と指導のあり方」文部省『文部時報』(1989),p.5.
- 13) 前掲論文9) p.200.
- 14) 中山清・小沼尚巳・吉田昭久「『学校不適應』児童・生徒に対する教育臨床心理学的対応—学校不適應概念の検討—」『茨城大学教育実践研究』第12号(茨城大学教育学部附属教育実践研究センター, 1993),p.314.において、「学校不適應とは、学校状況においてみられる現象であり、多様な人間関係を持たず、学校体制や学校教育状況に参加していない状態」と規定した。
- 15) 前掲論文14) p.314.
- 16) R. メイ著 小野泰博訳『ロロ・メイ著作集1 失われし自我を求めて』(誠信書房,1992), p.88.
- 17) E. H. エリクソン著 仁科弥生訳『幼児期と社会 2』(みすず書房,1992),p.3.
- 18) 前掲書16) p.88.